執　人

あらゆる人々の性格や外面は一人一人異なるものである。人の上に立つ者、すなわち首領ともなるべき者は、諸事をさしおいても、先ず人を知ることが肝要（かんよう＝最も重要）である。人心の知り難いことについては、昔の人々も悩み苦しんできたところである。愚昧（ぐまい）な者には到底知り得るものではない。山濤という人は、たいそう賢明であったにもかかわらず、簡という家来が三十歳になるまで、彼の丹心（たんしん＝まごころ、赤心）を知らなかったと言われている。ましてや事にいたって智力を極めていないようなものが、どうして人の上に立つことができようか。女は自分を喜んでくれる者の為に容姿を飾り、士は己を知る人のために忠節を尽くすといわれる。太公望・管仲・張子房・諸葛亮、魏徴・李衛公、古今の名士は皆これらをよく承知していた。ほとんどの場合、人を取り立てる（採用する）方法において貴賤親疎の隔ては無いとは言うものの、親疎が無いような所にも親疎はあらねばならない。

第一には譜代（数代にわたり主家に仕えてきた家系）、第二には位の高いもの、第三には忠義の子孫、第四には智能の士、第五には七芸の士である。この七芸とは、一には力量、二には早業、三に弓、四に馬、五に水練（水泳）、六に揮忍（きにん＝忍者を指揮して情報を収集）、七に弁舌の才のことである。たとえ万能ありと言われても、勇気や道義心に欠け、十悪十僻（僻　へき＝正常でないこと）が有れば、何の役に立つであろうか。十悪とは、一には「不忠不孝」、二には「不正直」、三には「好色」、四には「欲深さ」、五には「妄語偽言（ありもしないことや嘘をいうこと）」、六には「讒言間言（ざんげんかんげん＝事実を曲げ、偽って人を悪く言うこと）」、七には「驕慢花奢（おごりたかぶり）」、八には「邪智（邪悪な智恵）」、九には「嗜食（ししょく＝珍しいものを好んで食べること）」、十には「盗賊（盗み癖）」である。ここで言う賊とは「心の中の賊」であり、これには又、六つが有る。すなわち、法賊（法を破る）・権賊（権力欲）・功賊（勲功への固執）・豊賊（物欲）・風賊（※意味不明）・姦賊（らいぞく＝心のわだかまり）がこれである。

十僻とは、一には「佞僻（ねいへき＝異常な程に媚びへつらう）」、二には「使僻（異常な程に人使いが荒い）」、三には「妬僻（異常な程に妬む）」、四には「怒僻（異常な程に怒る）」、五には「忽僻（異常な程に軽々しい）」、六には「悠僻（異常な程に悠長である）」、七には「偏僻（異常な程に偏る）」、八には「曲僻（異常な程に曲がったことをする）」、九には「竪僻（異常な程にえばり散らす）」、十には「潤僻（異常な程に悲観的である）」である。又、十失十誘がある。柔和にして人を罰するに忍びないとして権威を失う者がいる。極度に信じやすいため人の詐欺を信じ、かえって信用を失う者がいる。私欲がなく心や行いが正しいが、人と愛和せずにかえって親しみを失う者がいる。言葉や態度が丁寧すぎて、かえって無作法で見苦しく、好意を失う者がいる。ものごとの先を読んで判断できず、悠長にしてうろたえて取り乱す者がいる。寛大で温厚ながらも細かいことに気が回らず、事をなすに粗雑な者がいる。節操は気高く、自己を清澄にして、人を失う者がいる。思案多弁にして細かいことにこだわり、時間を失う者がいる。治に得て乱に失う者（平時に役に立つが、戦時に役に立たない者）がいる。乱に得て治に失う者（戦時に役に立つが、平時に役に立たない者）がいる。これらを十失という。

外貌は温良でありながら、内心は不肖（愚かで未熟）な者がいる。外貌は大きな度量があるようで、内実は浅はかで卑しい者がいる。外面は慎み深く礼儀正しいが、内心は堕落しきった人がいる。外面は勇敢に見えても、内心は臆病な者がいる。外からは剛毅・屈強に見えて、内実はびくびくと怯えている者がいる。外からは素質が有りそうで、内心は事実無根のことをおおげさに言うだけの者がいる。一見その行動が意気に燃えて勇ましいが、内実は媚びへつらうだけの者がいる。外見には正直者を装いながら、実は嘘ばかりついている者がいる。外面は謹謙（かしこまってへりくだる）でありながら、内実は無礼な者がいる。外面は清廉潔白でありながら、密かに盗みをはたらく者がいる。これらを十誘という。これらを識り、これらを用いるには、注意すべき八つの徴候と七つの害がある。